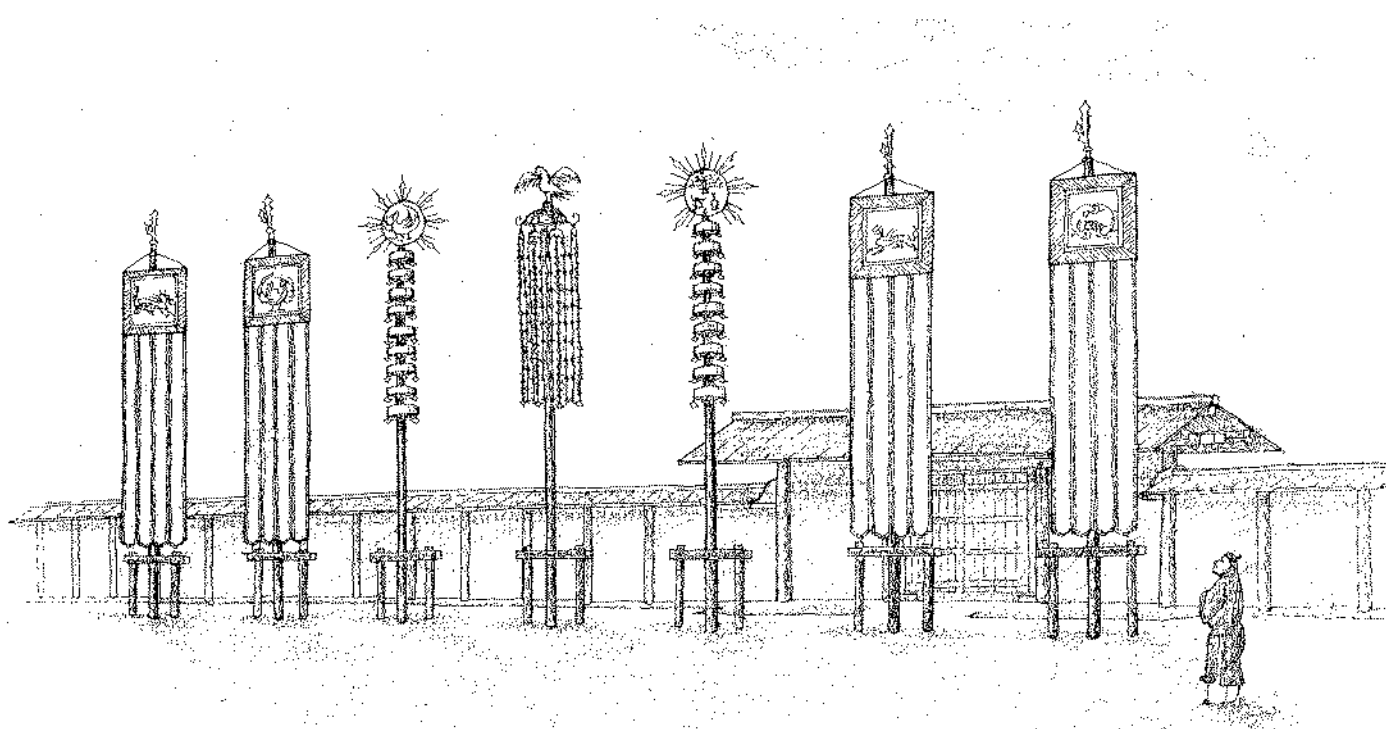


平成 27 年度  
恭仁宮跡発掘調査（第 95 次）  
現地説明会資料



京都府教育委員会  
平成 27 年 10 月 10 日（土）

## はじめに

京都府内には、古代に平安京、長岡京、恭仁京という3つの都が造られました。京都市の中心部に造られた**平安京**は、延暦13（794）年から明治元（1868）年までその役割を果たした、いわゆる「千年の都」です。また、平安京に都が遷される直前の延暦3（784）年からの10年間は、現在の向日市・長岡京市・京都市・大山崎町にかけて造られた**長岡京**で政務が行われました。

そして、この3つの中では最も古く、今からおよそ1270年前の天平12（740）年に、聖武天皇により、現在の木津川市加茂町、山城町、木津町にわたって造られたのが「**恭仁京**」、その中心となるのが、加茂町瓶原の地に造られた「**恭仁宮**」です。

宮の中には、主に天皇が暮らし、さまざまな儀式などが行われた内裏、政治や国家の儀式などがおこなわれた大極殿や朝堂院、さらには官人達が仕事を行った役所（官衙）など、国の中でも最も重要な施設が造られました。恭仁宮を中心とする木津川市の一帯は、短期間ながら国の首都となっていたのです。

しかし、その4年後の天平16（744）年には、都は大阪の**難波宮**へと遷され、さらには平城京へと戻されることとなりました。恭仁宮は、その役目を終えた後、天平18（746）年に山城（山背）国分寺へと造り替えられました。



## これまでの調査成果

---

昭和 48 年度以降、京都府教育委員会や加茂町（現木津川市）教育委員会が毎年実施している発掘調査によって、宮の範囲、大極殿や内裏などの宮内の主要な施設が見つかり、恭仁宮の実体が少しずつ分かってきました（第 1 図）。

恭仁宮は東西に約 560 m、南北に約 750 m の大きさで設計され、その周囲は高い土塀（築地塀）で囲まれていました。

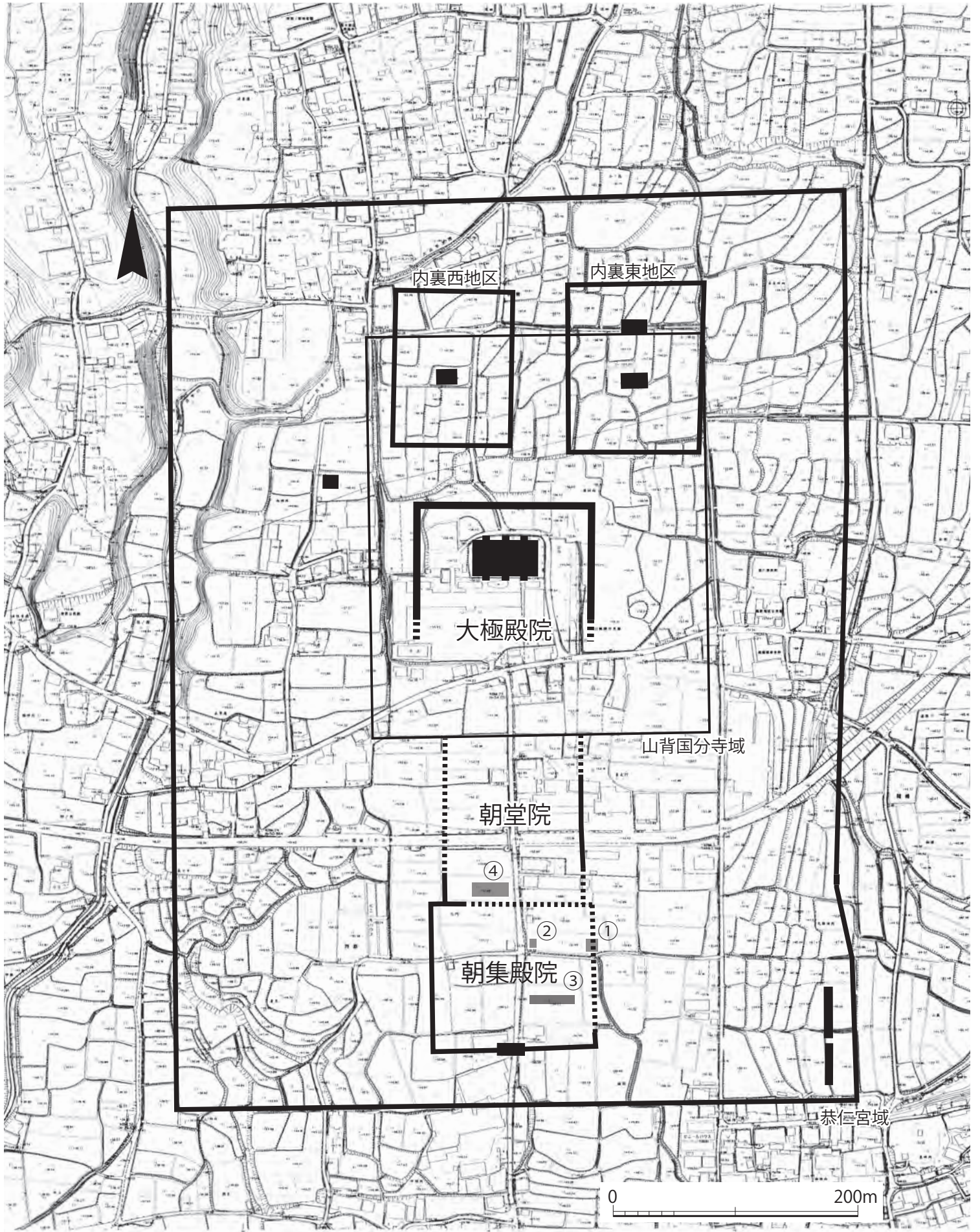
**大極殿**は、宮の中心から少し北側に造られており、高さ 1 m 以上の大きな土壇の上に造られた東西が 45 m、南北が 20 m もある大きな建物でした。朱塗りの太い柱を大きな石材（礎石）の上に建てた礎石建物で、北西と南西の隅に置かれていた礎石は、当時のまま動かされていないことが調査によってわかりました。

大極殿院を取り囲む回廊は、北西隅付近を確認しています。回廊は築地を中央に築き、その両側を通路にした「複廊」と呼ばれる立派な形式のものです。奈良時代に関する公の歴史書である『続日本紀』には、平城京から恭仁京へ都が遷された際、平城宮の大極殿とともに、その周囲に設けられていた「歩廊」が恭仁宮へ移築されたことが記載されています。発掘調査の結果、恭仁宮の大極殿や築地回廊が、平城宮と同じ規模で造られていることが確認され、『続日本紀』の記述が裏付けられました。

大極殿の北側には、内裏に相当する施設が東西に 2 つ並んで設けられていたことを確認しています。現在のところ、この 2 つの区画をそれぞれ「内裏西地区」、「内裏東地区」と呼んでいますが、このような施設の配置は、恭仁宮以外には見られなかったもので、どちらが天皇の住まわれた内裏なのかは、はっきりしていません。「内裏西地区」は、周りが全て板塀（掘立柱塀）で囲まれた、東西約 98 m、南北約 128 m の大きさです。「内裏東地区」は北側が板塀（掘立柱塀）、残る南側、東側及び西側は、土塀（築地塀）で囲まれており、東西約 109 m、南北約 139 m の大きさで、「内裏西地区」より一回りほど大きく造られていることがわかっています。

**朝堂院・朝集殿院**では、これまでその周囲を区画する板塀（掘立柱塀）の一部が確認されています。朝集殿院は、東西約 134 m、南北約 125 m の規模で、南側の朝集殿院南門が見つっています。朝堂院は、朝集殿院よりも東西幅がやや狭くなることがわかっています。南部では、朝堂院南門が見つかり、朝堂に相当する建物も 1 棟検出されています。





第1図 恭仁宮跡全体図および平成27年度調査対象地位置図 (S=1/4,000)



## 平成 27 年度調査でわかったこと

---

### (1) 朝集殿院の調査 (第 2 図・第 3 図)

朝集殿院は、官人たちが勤務前の早朝に集合し、朝堂院南門が開くまで待機した空間とされています。他の宮跡では、朝集殿院の中で左右一对の「朝集堂」と称される建物が見つっていますが、恭仁宮跡では未検出です。今年度は朝集殿院の内部構造を確認するため、3箇所の特レンチを設定して調査を行いました。

朝集殿院東端部の地点に設定した第1特レンチでは、特レンチ南東部で柱穴1基 (S P 03) と柱穴をはさんで南北方向の溝を2条 (S D 01、S D 02) 検出しました。これは朝集殿院東辺の掘立柱塀に伴う遺構と考えられます。この遺構は、従来の想定よりも東に約 50cm ずれた地点で検出されました。朝集殿院の平面形態を検討する上で、今回見つかった遺構の位置は重要になります。

朝集殿院中央東よりの地点に設定した第2特レンチでは、特レンチ中央部で柱穴を数基検出しました。南北方向に並ぶ柱穴列が含まれることから、掘立柱建物の一部と推測されます。第2特レンチのすぐ西側では、昭和 59 年度の発掘調査で小規模な掘立柱建物が見つかっており、主軸方向が今回見つかった柱穴列と同じです。したがって、この一帯には同じ時期の建物が数棟存在した可能性があります。

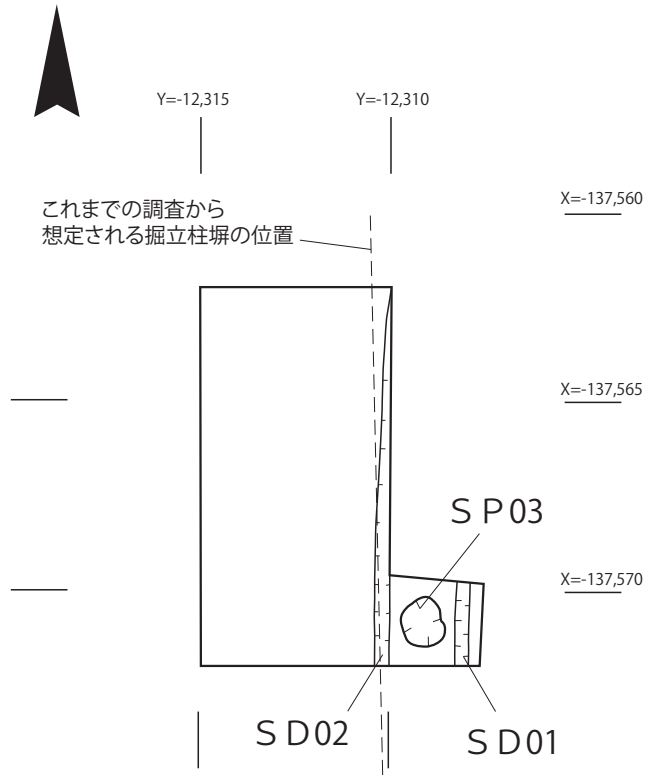
第3特レンチでは顕著な遺構は確認されませんでした。第2層～第4層からは遺物が多く出土しました。特に、第3層と第4層は、出土遺物の年代から恭仁宮の時期の堆積層と想定されます。最下層の第5層は自然堆積層ですが、西から東に向かって傾斜が下がっています。このような地形を放置していたとは考えにくいことから、第3層と第4層は、恭仁宮の造営に伴ってほかの地点より低い地形を埋めた整地層であることがわかりました。

### (2) 朝堂院 (宝幢 (幢旗) 遺構) の調査 (第 4 図～第 8 図)

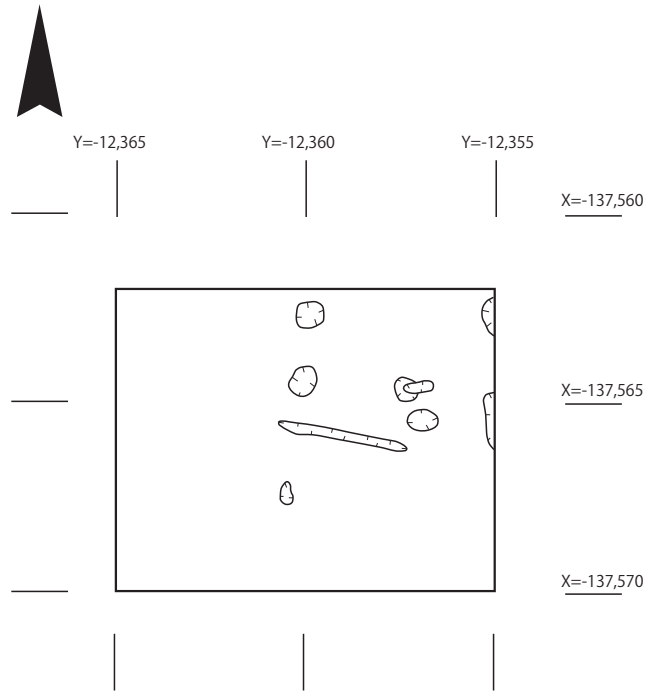
#### ①遺構について (第 4 図)

朝堂院の南部に設定した第4特レンチでは、東西方向の溝 (S D 14214) を検出しました。朝堂院の排水溝と考えられます。また、東西に3基並ぶ土坑を確認しました (S X 01～03)。S X 01～03 は朝堂院南門及び朝堂院南辺の掘立柱塀から約 12m (40 尺) 北に位置します。また、東端の S X 03 は朝堂院

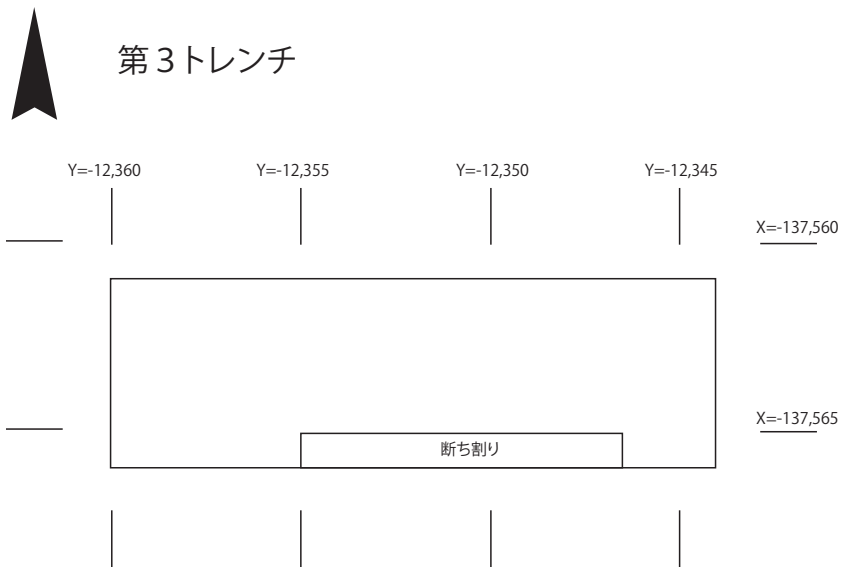
### 第1トレンチ



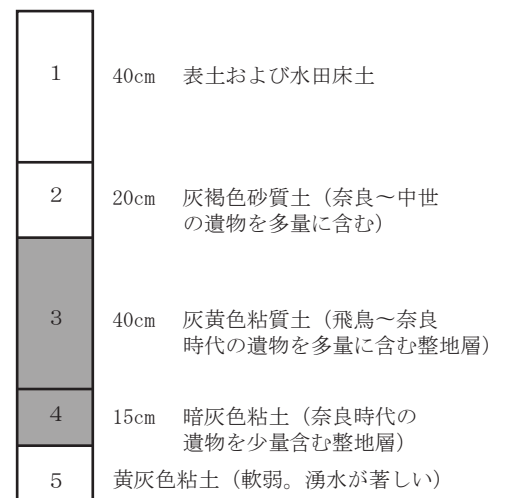
### 第2トレンチ



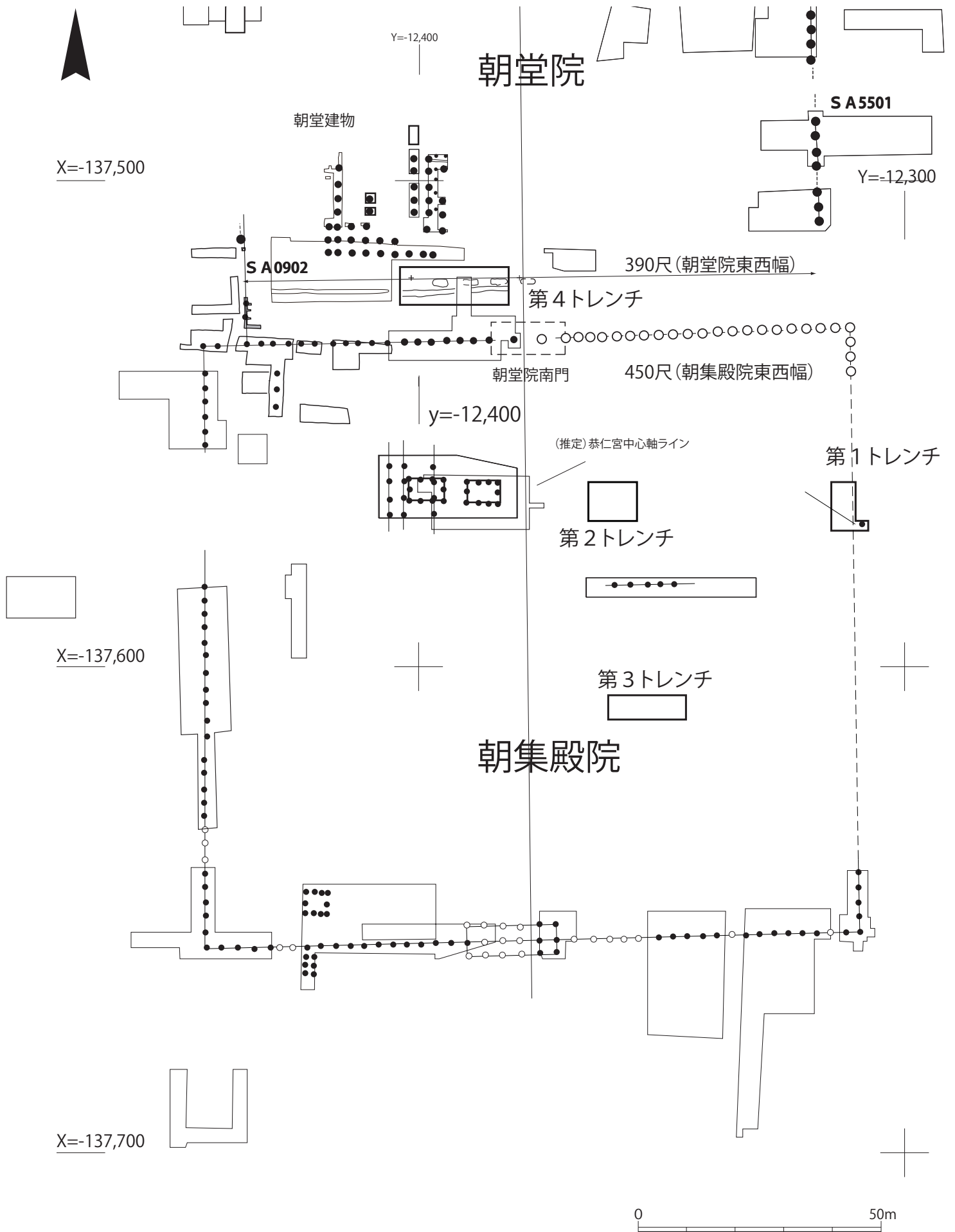
### 第3トレンチ



### 第3トレンチ断ち割り土層柱状図



第2図 第1~第3トレンチ平面図 (S=1/200)・土層柱状図 (S=1/20)



第3図 朝集殿院地区・朝堂院地区南部トレンチ配置図 (S=1/1,000)

の主軸から約 6.6 m (22 尺) 西に位置します。それぞれの土坑の中心間の距離を測ると、約 5.4 m～5.5 m (18 尺) の一定間隔で並んでいることがわかります。そして、それぞれに 3 本ずつの柱が並んで立っていた痕跡を確認しました。

S X 01 より西には土坑が存在しませんが、S X 03 より東には同じ間隔で並んでいるものと推測されます。そしてその場合、4 基めの土坑は朝堂院の中軸ライン付近に位置することとなります。古代の宮の構造物は左右対称が原則であることから、朝堂院中軸ラインを東に折り返すと S X 01～03 と対称の位置に 3 基の土坑が存在することとなり、合計 7 基の土坑と考えられます。このような構造と配列は、平城宮跡、長岡宮跡で見つがっている宝幢（幢旗）遺構と共通することから、S X 01～03 は宝幢（幢旗）遺構であることが判明しました。

今回の調査では、S X 02 と S X 03 を半分掘削し両遺構の土層の堆積状況を調べました。そして、特に S X 02 では遺構の上面と底面で明らかに時期の異なる柱の痕跡を確認したことから、この場所では 2 回にわたって宝幢（幢旗）が立てられたことがわかりました。

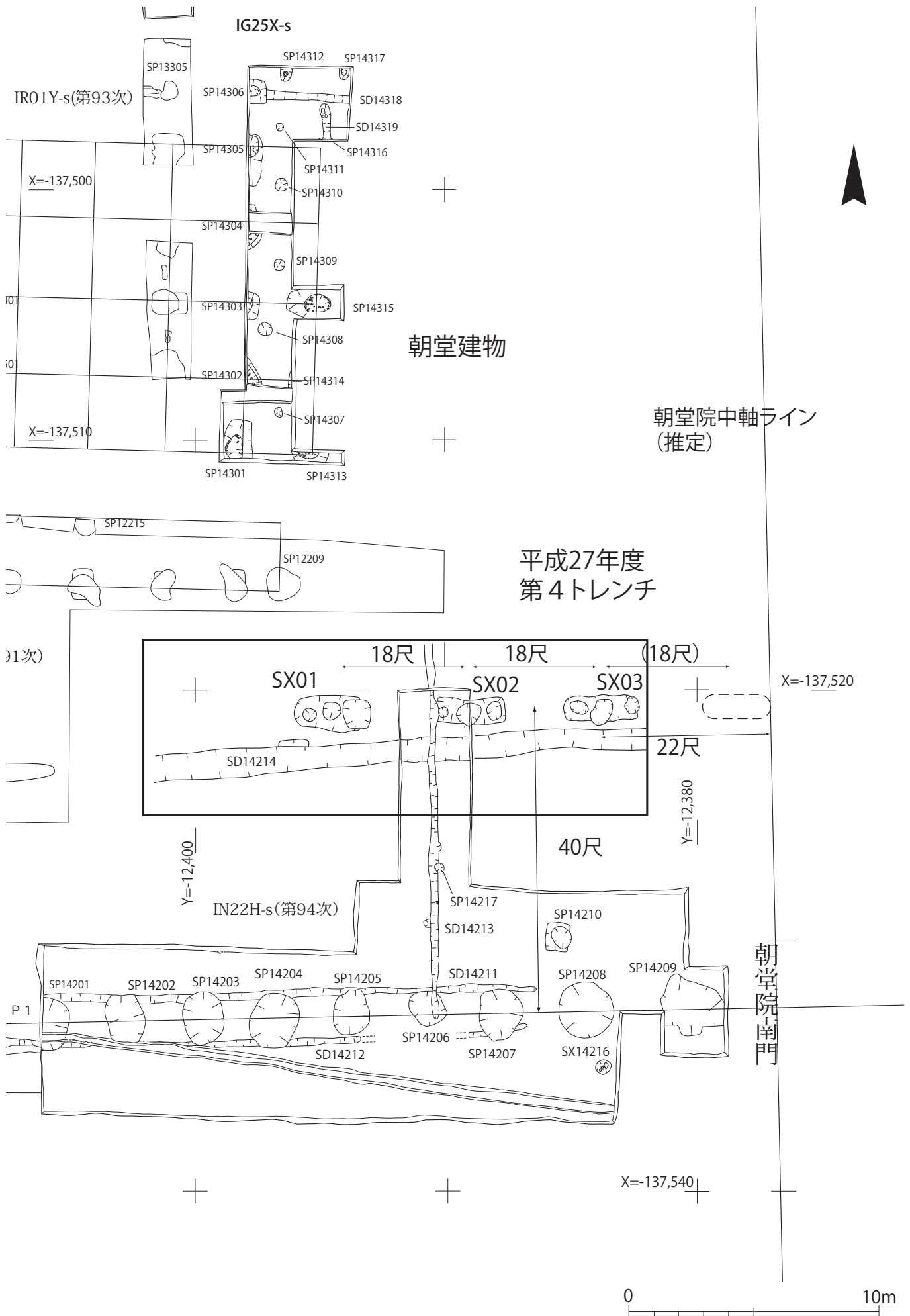
## ②宝幢（幢旗）とは（第 5 図・第 6 図）

宝幢（幢旗）とは、元日朝賀や天皇の即位儀礼の際に立てられた装飾を施した旗竿です。文献上では、元日朝賀で宝幢（幢旗）を用いた最古の事例は 701（大宝元）年の事です。奈良時代の『続日本紀』と、平安時代中期の法令集である『延喜式』、平安時代後期の即位儀礼の調度を描写したとされる『文安年間御即位調度図』を総合すると、宝幢（幢旗）は 7 基で構成され、天皇の座する高御座の正面には銅鳥幢、その両脇には東に日像幢、西に月像幢が立てられました。さらに、その外側には方角を示す四神の旗が立てられ、日像幢の東には青龍旗と朱雀旗が、月像幢の西には白虎旗と玄武旗が配置されました。今回見つかった遺構は、位置関係から S X 01 が玄武旗、S X 02 が白虎旗、S X 03 が月像幢に該当します（第 6 図）。

また、『延喜式』によると各宝幢（幢旗）の間隔は「二丈ばかり」（20 尺、約 6 m）と指示されています。ちなみに、S X 01～03 の間隔は、それぞれ 18 尺なのでほぼ一致します。

なお、『文安年間御即位調度図』には、各宝幢（幢旗）の柱の高さは「三丈」（約 9 m）と明記されています。恭仁宮の宝幢（幢旗）が実際に 9 m の高さであったかはわかりませんが、天皇や古代国家の権威を象徴するのにふさわしい高さの宝幢（幢旗）だったでしょう。





8 第4図 第4トレンチ・周辺トレンチ平面図 (S=1/200)

### ③ 『続日本紀』にみる恭仁宮の元日朝賀（第5図）

宝幢（幢旗）を立てる儀式は、即位儀礼、元日朝賀が候補として挙げられますが、『続日本紀』を参照すると、恭仁宮で行われた重要儀式は元日朝賀に限られています。

恭仁宮の元日朝賀に関わる記述をみると、740（天平12）年12月15日に聖武天皇は恭仁京を都と定め、宮都の造営に取りかかりました。そして、その半月後の741（天平13）年1月1日に初めて百官から元日朝賀を受けました。『続日本紀』には、宮垣がまだできていないので帷帳<sup>ひゃっかん</sup>を巡らせて行った、と記述されています。

翌年の742（天平14）年1月1日には、大極殿がまだ完成していないので仮に四阿殿<sup>しあでん(あずまやどの)</sup>を造って百官から元日朝賀を受けています。

さらに、翌年の743（天平15）年1月3日になって、初めて大極殿で元日朝賀が行われました。すなわち、この年まで恭仁宮の大極殿は完成しておらず、741（天平13）年と742（天平14）年の2回の元日朝賀は、大極殿以外の仮の場所で行われたことがわかります。通常、元日朝賀は大極殿で行われるものです。『続日本紀』によると、ほかの場所で元日朝賀が行われた事例はごくわずかで恭仁宮以外には平城宮西宮で行われた765（天平神護1）年と769（神護景雲3）年だけです。

そして、今回見つかったSX01～03の大きな特徴は、大極殿の前に存在するはずの宝幢（幢旗）遺構が朝堂院の南辺付近で見つかったことです。また、遺構の土層観察から、宝幢（幢旗）が2回立てられたことがわかります。したがって、『続日本紀』に記述される大極殿以外で行われた741（天平13）年と742（天平14）年の元日朝賀の舞台は、まさにこの場所であったことが判明しました。

元日朝賀関連文献

『続日本紀』 大宝元年正月（出典：国史大系本による）

大寶元年春正月乙亥朔、**天皇御大極殿受朝**。其儀於正門樹鳥形幢、左日像青龍朱雀幡、右月像玄武白虎幡。番夷使者陳列左右、文物之儀。於是備矣。

『延喜式』（出典：国史大系本による）

兵庫寮

凡元日及即位構建寶幢等者、預錄色目移送兵部。前十五日復請夫單廿人。各日飯五升。鋤十五口。返上。待官符到寮與木工寮共建幢柱管於大極殿前庭龍尾道上。前一日率内匠寮工一人。鼓吹戶卅人。構建寶幢。從殿中階南去十五丈四尺建鳥像幢。左日像幢。次朱雀旗。次青龍旗、此旗當殿東頭幢。右月像幢。次白虎旗。次玄武旗、相去各二丈許、翼蒼龍、白虎兩樹兩端幢平頭。訖並返納。

恭仁宮で行われた元日朝賀の記事

『続日本紀』

・天平十二年正月

十三年春正月癸未朔、**天皇始御恭仁宮受朝**。宮垣未就。繞以帷帳。是日、宴五位已上於内裏。

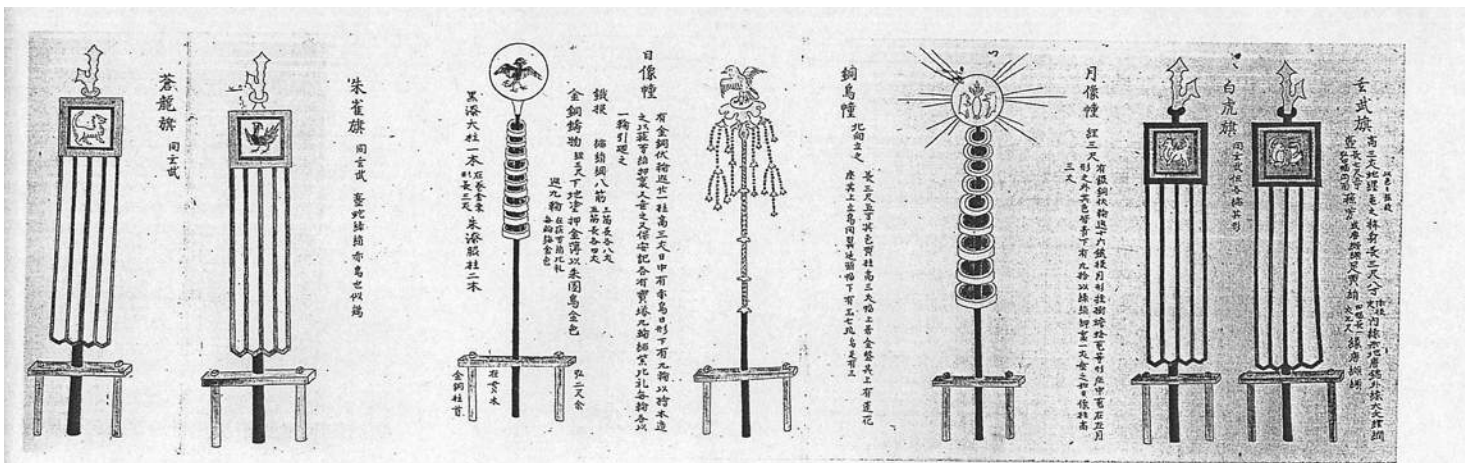
・天平十四年正月

十四年春正月丁未朔、**百官朝賀**。爲大極殿未成。權造四阿殿於此受朝焉。石上榎井兩氏始樹大楯。

・天平十五年正月

十五年春正月辛丑朔、遣右大臣橘宿禰諸兄、在前還。恭仁宮。○壬寅、車駕自紫香樂至。○癸卯、**天皇御大極殿百官朝賀**。

神宮文庫「文安御即位調度之図」

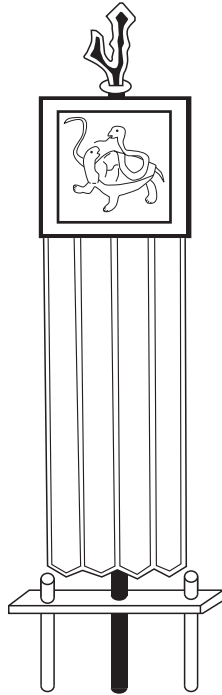


「文安御即位調度之図」 神宮文庫

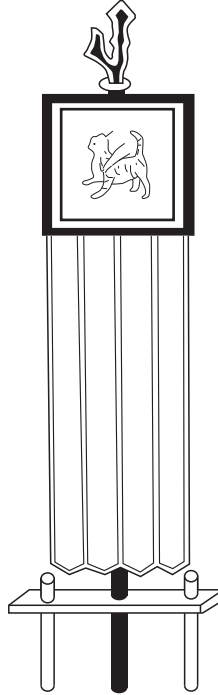


今回みつかった遺構に立てられていた宝幢(幢旗)

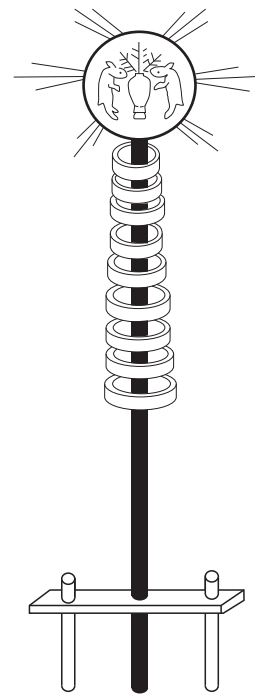
げんぶき  
玄武旗(S X01)



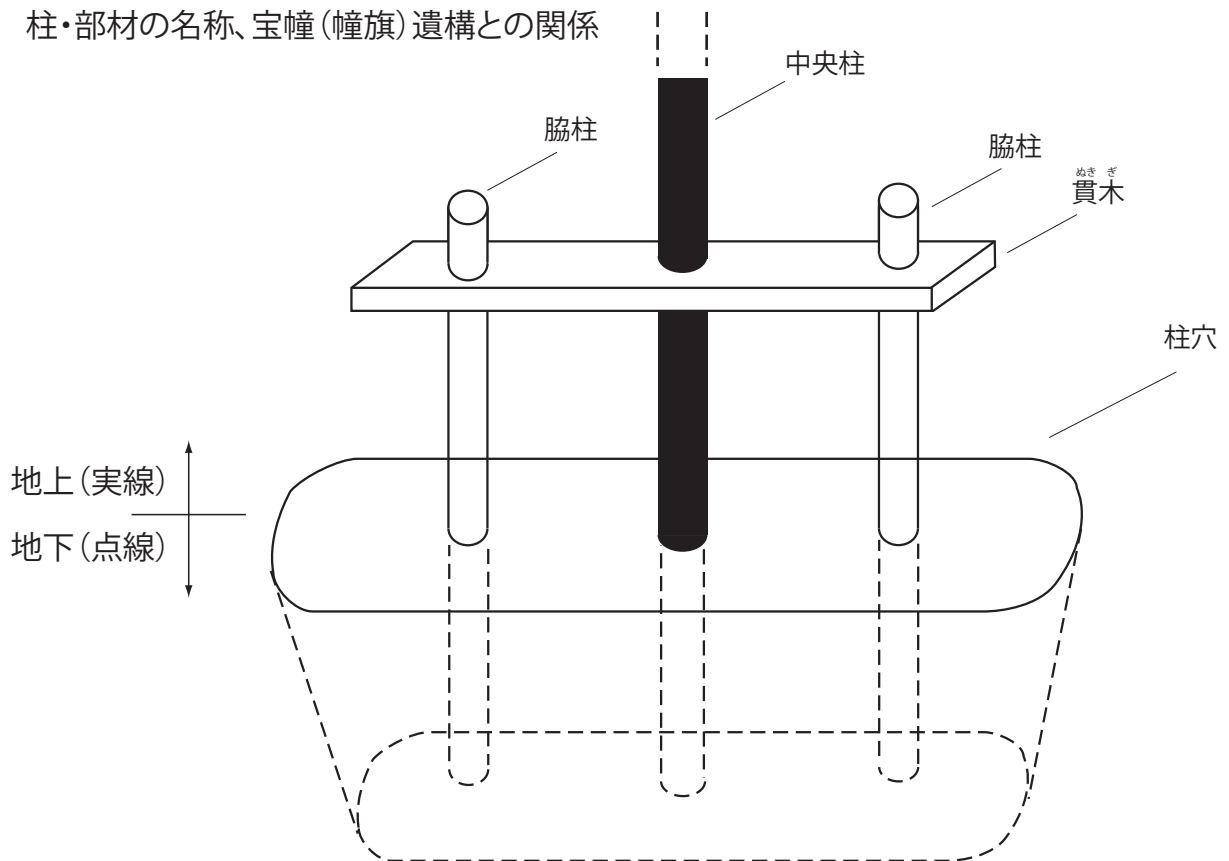
びやっこき  
白虎旗(S X02)



げつぞうどう  
月像幢(S X03)



柱・部材の名称、宝幢(幢旗)遺構との関係



第6図 宝幢(幢旗)遺構の構造

天武	飛鳥淨御原	672 (天武 1) 飛鳥淨御原宮遷都	
		673 (天武 2) 天武天皇即位	
持統	藤原	690 (持統 4) 持統天皇即位	
		694 (持統 8) 藤原京遷都	
文武	藤原	697 (文武 1) 文武天皇即位	701 (大宝 1) 文武天皇、大極殿で元日朝賀。 七本の幢幡を立てる。(続日本紀)
元明	平城(第一次)	710 (和銅 3) 平城京遷都	
元正		715 (靈龜 1) 元正天皇即位	
聖武	平城(第一次)	724 (神龜 1) 聖武天皇即位	
		740 (天平 12) 恭仁京遷都	741 (天平 13)・742 (天平 14) 恭仁宮朝堂院 (元日朝賀)
孝謙	恭仁	745 (天平 17) 平城京遷都	
		749 (天平勝宝 1) 孝謙天皇即位	
淳仁	平城(第二次)	758 (天平宝字 2) 淳仁天皇即位	
		764 (天平宝字 8) 称徳天皇即位	765(天平神護 1) 平城宮西宮 (元日朝賀) 769(神護景雲 3年) 平城宮西宮 (元日朝賀)
称徳	平城(第二次)		
		770 (宝龜 1) 光仁天皇即位	770(宝龜 1) 平城宮第二次大極殿院 (光仁天皇即位)
光仁	平城(第二次)		
		781 (天応 1) 桓武天皇即位	781(天応 1) 平城宮第二次大極殿院 (桓武天皇即位)
桓武	長岡	784 (延暦 3) 長岡京遷都	
			785 (延暦 4)~793 (延暦 12) 長岡宮大極殿 (元日朝賀)

## まとめ

---

朝堂院南辺で宝幢（幢旗）遺構 S X 01 ～ 03 が見つかったことは、『続日本紀』に記述された元日朝賀の記録を明らかにしました。そして、同じ場所で 2 箇年にわたって元日朝賀が行われたこともわかりました。さらに『続日本紀』だけでは特定できなかった元日朝賀の場所が発掘調査で判明しました。

今回見つかった宝幢（幢旗）遺構と同じ構造の遺構は、平城宮跡、長岡宮跡でも検出されていますが、いずれの事例も恭仁宮より後の時期のものであることが確定しています。したがって、S X 01 ～ 03 は、定型化した宝幢（幢旗）の存在を示す遺構として最も古いことがわかります。

恭仁宮で即位した天皇はいないことや、ほかの重要儀式が記録に残っていないことから、今回の宝幢（幢旗）遺構は確実に元日朝賀に伴うものと判断されます。文献に記された日本で最初に宝幢（幢旗）を立てた元日朝賀は、『続日本紀』の記載から、藤原宮で 701（大宝元）年に行われたことが判明しています。しかし、恭仁宮より古い時期の元日朝賀を示す宝幢（幢旗）遺構はまだ発掘調査では確認されていません。S X 01 ～ 03 は、日本で元日が祝われたことを示す遺構として最も古いと言えます。今回の調査は、史跡恭仁宮跡の歴史的な重要性をあらためて示すことになりました。

\*\*\*\*\*

最後になりましたが、今回の調査に際し、調査に参加していただいた皆さん、各方面から御指導、御協力いただいた方々に、深く感謝いたします。

\*\*\*\*\*